

- (古川) ほとんど全部大型マッコウばかりであった。稀に小型も見かけたがハレムなどはみられなかった。
- (宇田) 餌料では変わったことはないか？
- (古川) イカが主体で例年と特に変化はない。

2. 近年の北太平洋及びベーリング海域のナガスクジラについて

加藤 英明 (日本水産株式会社)

1. 統計が当社のみのもので、全体を推測することは出来ないが、過去の当社の操業圏内での、ナガスクジラの分布状況即ちナガス漁場としてはおおよそ、
- (イ) カムチャッカ半島東岸シブンスキー岬からロボトカ岬にかけての沿岸寄り及びロボトカ岬東南東100哩附近の海域並びにコマンドル諸島周辺。
 - (ロ) 西経の列島北側四ツ山島附近よりブリビロフ諸島に至る200尋等深線以深の海域。
 - (ハ) アラスカ湾中央部各シーマウント周辺の海域。
 - (ニ) 北アメリカ大陸西岸クィーン・クワーロッセ諸島以北の距岸20哩以内の海域。
- が挙げられるが、特に大きな群の構成は少ない。

2. 捕獲頭数の年次別変化

1965年(14次)から5年後の1970年(19次)の捕獲頭数は国際規制により枠の減少があった事にもよるが、下表の様に略々半減している。

即ち、

	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年
ナガス	376頭	337頭	215頭	208頭	198頭	184頭
イワン	396頭	591頭	957頭	978頭	1119頭	990頭

但し以上の数値はナガスよりもイワンの白長須換算当りの価値が高いことにより捕獲の対象をナガスからイワンに置き換えたことと、前出の国際規制の結果である。

尚ナガスとイワンの捕獲比率は下表のごとくなっている。

	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年
ナガス	66.7%	47.9	36.3	18.3	17.5	15.0
イワン	32.7%	50.5	63.7	81.7	82.5	85.0
シロナガス	0.6%	1.6				

3. 発見頭数の年次別変化

発見頭数についても前項で述べた様に、イワシを主体に操業が行われた結果、ナガスとイワシの漁場が夫々若干宛づれているため調査船及び操業船の発見は当然ナガスが減少しイワシが多くなる結果になって現われている。

(参考までにシロナガスクジラ・ザトウクジラの発見も併記した。)

	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年
ナガス	1068頭	718	489	875	398	351
イワシ	823頭	891	1746	2337	1931	1409
シロナガス	28頭	28	10	34	44	15
ザトウ	99頭	98	37	17	76	86

(1967年及び1970年におけるシロナガスクジラの発見が少ないのは、その年次の船団操業区域のためと思われる)

4. 東経漁場と西経漁場における相違点

(イ) 平均皮厚と採油歩留り

経度180度を境に東経側において捕獲したナガスと、アラスカ湾を含めた西経側において捕獲したナガスとを比較観察した場合、東経側のそれは体皮も厚く、従って採油歩留りも高い値を示しているのが特徴である。(イワシについても、同じことが言えると思う)

即ち下表の1967年(16次)はナガスの内80%を東経で捕獲し、1968年(17次)は100%を東経で捕獲している。

	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年
平均皮厚	6.3cm	6.3	7.7	7.6	6.9	6.7
採油歩留	13.65t	12.60	16.20	16.24	14.68	12.69

(ロ) 平均体長について

北洋におけるナガス鯨は東経、西経を問わず全海域共年によって特に差異は認められない様である。

過去1910年、1911年、及び1912年頃コマンドルスキー諸島からオリュートル湾にかけて、またはコジャック島からアラスカ湾奥にかけてみられたような大きなナガスの群は近年殆んど見られなくなったが規制の効果がポツポツ現われて一頃よりは若干宛鯨影も増えて来た様な感じを受けている。

〔質疑応答〕

(吉成) 今年のベーリング海のナガスは60フィート位か、北太平洋側と比べてどうか?

(加藤) 全体にベーリング海のは小さいと思う。